

# Vascular Street

2013年

新  
春  
特  
集

## 芸術する心と体

第69回 日本循環器心身医学会総会 市民公開講座「命の大切さを考える」



【特別講演】 彫刻家 外尾 悦郎 氏

### 外尾悦郎先生のプロフィール

福岡市福岡高校出身、1978年にバルセロナに渡り、彫刻家として認められ、アントニオ・ガウディが作ったサグラダ・ファミリア、これはガウディ死後130年経っても、いまだに建設が行われているという壮大な建築物ですが、この建築に携わっております。

リヤドロ・アートスピリッツ賞、福岡県文化賞、日本とスペインの文化交流の促進の功績によって、2008年外務大臣表彰受賞、2010年国際カトリック文化賞金メダル受賞、2012年ミケランジェロ賞を受賞されています。



【座長】 福岡大学医学部 心臓・血管内科学 教授  
福岡大学医学部 心臓血管外科学 教授

朔 啓二郎 先生  
田代 忠 先生

### はじめに

現在、スペイン、バルセロナのサグラダ・ファミリアで彫刻家としてご活躍の外尾悦郎氏をお招きし、「芸術する心と体」をテーマにご講演をお願いした。第69回 日本循環器心身医学会総会の公開講座をして開催したが400名の市民の方の参加があった。

**外尾** 人間というのは自然に大きく振り回されます。この柱がサグラダ・ファミリアの内部です。2年前に完成しました。ローマ法王が来られて、献堂式といいまして、130年間作り続けている聖堂ですけども、やっと教会として使っているという許可が下りました。垂直に立っているようですが、これは垂直にたっていません。すべての柱が傾いています。ガウディはそうように作れといっています。自分たちが作っているにもかかわらず、それを唯一知っていたのはガウディです。なぜこのようなものを作ろうとしたのか？ガウディが作ろうとした意思を解くのに精いっぱいでしたが、コンピューターのおかげでガウディがよく理解されるようになってきたわけです。





でも、ガウディはコンピューターなしでやっていたということ。私たちは、コンピューターのおかげでガウディに近づくことができましたが、ガウディはコンピューター無しでやっていた。若い方々は、コンピューターや携帯電話なしでは、毎日生きていくことができないような方々がおられますけども、それは間違いです。コンピューター無しで人間は生きてきた。ガウディはコンピューター無しでこの建設をやってきました。コンピューターがあれば理解しやすくなる、それは確かです。ですが、それは道具です。私もコンピューターを使っていますし、携帯電話は非常に便利ですが、それに負けてしまっただけは何かが変わってくるのではないかと。

すべての生き物は生まれ、変化し、死んでいく。その変化とは何か。それは、良き時間を過ごし、歳をとっていくことでしょうけど、本質というものを失いますと、改革ということを忘れて、良き方向に向かうことを忘れて、単なる変化になり、変化したものは死んでいく。つまり、本質を忘れないことがとても大切なことだろうと思います。人間がこれから生きていく上で、色々な道具を作っていくでしょうが、それによって人間としての本質を忘れてしまっただけでは、人間がどこに行ってしまうか、それは悲しい死を迎える。この世の中で確かなものは何一つありませんが、世界中の人は、生き物は必ず天国にきます。それだけは確かです。それまでの間に何をすべきか。

人間というのは自由を求めて人生を生きていきます。私も自由を求めてヨーロッパに渡りました。ですが、本当の自由というのは、自分がどこにいても少しずつ高めていくこと。1ミリでも自分を高めること。それが人間にできる最高の自由ではないかと思えます。

私が大切にしたいのは、私の言葉をそのまま受け取るよりも、その言葉を受けたご自分が何に変えていくか。これは、簡単な言葉のようですが、人はそうやって生きています。だからこそ生きてこれたわけです。言葉遊びで、隣の人に言葉を伝えて、それを繰り返すと言葉が変わってきます。正しいことが伝わらない。それでいいのです。美しき不完全さ、人間は不完全だから生きて行けるわけです。人間が完璧だったら、人間は生きていけません。明日が分からない、先が分からないからエネルギーが出てくる。人間というのは不完全であることがどんなに美しいことなのか、またそれを美しくしていかなければいけない。その道具がこれです。ガウディはその道具を一生懸命作りました。サグラダ・ファミリアと言うのは建造物ですが、実は私たちを作っていく道具です。不完全であることを美しきものに。だけでも人間には知性があります。インテリジェンスと言うのは少し先が分かるということです。小さなお子さんが走っているのに、「危ないよ、こけるよ」と言うと、必ずコケます。その自由、それも素晴らしいことです。ですが、走ると危ないということが分かるインテリジェンス。人間はすべて未来を知ることにはできません。しかし、少し先を知ることができる。そのための知恵、それがとても大切だと思います。

教育、これは社会の原動力です。そのエネルギーは知性、知恵というものを私たちは大事につくっていかなければいけない。知恵というのは、情報、知識の集大成では決してありません。知恵というのは、情報や知識、そういったものに何かをかぶせたとき、その素材の味が大きく幅を広げて良いものになっていく、それはなんでしょう、愛情です。その愛情という言葉は昔から使われていますけども、心というものと大きくかかわってきます。

ガウディは生まれたとき、小児リウマチでした。貧しい家庭に生まれました。2年前に2歳と5歳の子供を亡くした家庭に生まれてきました。一つの家庭で二人の子供を同じ年に亡くしたらどんなに悲しいか、勇気を振り絞って次の子供を産みただけ、やはり病気だった。ただひたすら生き延びて欲しいと願うだけでしょ。それは、世界中の親の気持ちと同じです。そして、何千年先も変わってはいけない大切な気持ちだと思います。サグラダ・ファミリア教会が完成に近づいていますが、まだまだ完成しません。ガウディは、この教会はできるだけ時間をかけて作るべきだと。この建物の主は決してお急ぎにならない。主というのは神様のことです。ガウディが不幸な家庭に生まれ、病気で生涯を過ごし、苦悩の中でつかもうとした幸せ。彼は本当の幸せを理解できた男ではないかと思えます。

自分だけの幸せは長続きしない。だけど、人を幸せにすることによって、自分の幸せが大きく長いものになる。幸せは、人の心に自分が住みつき、そして人が自分の心に住み込むか、そしてそれをいかに大事にするかということではないかと思えます。

献堂式の当日、ローマ法王がいらっしゃいました。当時、主任建築家は涙を流してこの日を迎えて、我々も感動しましたが、なにより感動したのは、地元の人たちでした。130年間造り続けている教会ですけども、日本人ほどサグラダ・ファミリアが素晴らしいものだと思っている国民はいません。自分の持っているものに評価ができる人、これは大人です。自分の持っているものは何でしょうか、携帯電話でしょうか、車でしょうか、家でしょうか。それは、税金を払っていますから自分のものではないんです。自分のもの、それは健康、命、そして空気、今日のような太陽、風、美しい自然、自分のものですけども、それでも見ることができ、美しさを感じることができる。その昔、この教会は200年かかるだろうと言われていましたが、200年という数字は、やはり日本人が考え出せる一番大きな数字だったようです。ガウディも人を愛し、人の幸せとは何かということを考えて、この教会を造り続けたわけです。ガウディが生まれ育った家、おじいちゃんの家ですが、小児リウマチですから立つことも歩くこともできない。その少年は、リウマチの痛みとともに孤独の痛みを耐えなければいけませんでした。これだけ人類が進化した今、まさしくその孤独の痛みが増えている。それを解決するすべをいまだに見つけていない。しかし、そこには我々の持っている知恵



を生かすべきです。

教育と言うのはとても大切です。人間が社会のなかで生きていけないものだとすれば、その社会を大事にすること。その社会を教育する大人が欠けている気がします。ガウディが観察していたこの乾いた土地に、植物が生えていました。この近くに座っていると、トカゲやカタツムリ、小動物たちが顔を出してくれる。その時の驚き、喜び、その瞬間だけは孤独もリウマチの痛みも忘れることができました。つまり、自分を幸せにしてくれた小さな植物が、幸せの門だったのです。つまり、自然という驚きをもって見れる、自分を本当に幸せにしてくれた自然、それをサグラダ・ファミリアに託したかった。ガウディは、70歳を過ぎて神父様よりも司教様よりも知識を持っていました。その彼がいろいろなデザインを残していますが、最後は真実、自分を本当に幸せにしてくれた真実、それをサグラダ・ファミリアに託しているわけです。その真実とは何か、彼は素晴らしい芸術家ですが、彼は芸術とは、美とは何かと答えています。それは、真実の光の一瞬の輝き。真実がない芸術も美もありません。永遠に言語の違う人間たちを感動させ、何百年先の人間をも引き付ける、そこには真実があるからです。

先ほどから教育、社会という言葉を繰り返していますが、教育というのは、いろいろなお考えがあるでしょうけど、良い大学に行って、良い就職をして、良い生活をして、お金儲けをして、それが教育でしょうか。本当の教育というのは、良いことと悪いことを教える、非常にシンプルものではないかと思えます。何千年前のペルシャの教育は、三つのことしか教えてなかった。馬に乗ること、嘘をつかないこと、年上・目上・老人を大切にすること。

34年間と言うのはたくさんの仕事ことができました。しかし、すべてその仕事失敗したら次の仕事がないという厳しい条件のなかでやってきました。今ではサグラダ・ファミリアで1番古株になってます。古株は、「サグラダ・ファミリアとはこうあるべきではないか」ということを職人全員に伝えていきます。そして、ガウディがどう考えたか、私が皆さんに伝えたいのは、職人たちも含めガウディをみるのではない。多くの人がサグラダ・ファミリアを訪れます。それだけの人がサグラダ・ファミリアに来られてガウディを知ろうとする。その方々は、みんな一生懸命にガウディの作品をみようとする。それを通してガウディを知ろうとする。しかし、なかなかつかむことは難しい。

私は、この仕事しながら、ある日突然真っ暗闇の絶望といってもよい世界に落ち込みました。それは、ガウディの資料が全くない仕事を実現させなければいけなくなったときです。今まで何とか資料があったものを、自分なりに解釈してつくってきましたけど、何もない状態です。勉強するにも資料がない。しかし、自分はプロとして一步踏み出せなければならぬ。やめようかとも考えましたが、ガウディを頼って今まで仕事をしてきた。その頼るべきガウディが、こちらを向い

ていない、助けてはくれない。だとしたら、自分はダメなんだろう。みなさんがそう思ったとしたら、人類はここまで歩いてきていません。人類にあったのは、愛情と勇気です。何もないところを、一步踏み出したから人類は今まで来れた。それを続けなければなりません。安心して生活できる、世界でも稀に見るすばらしい日本という国に住んでいると、その勇気というものを随分と忘れてしまう。常に小さな勇気が我々を大きな未来へと引っ張ってきてくれたんですね。



ガウディも誰も助けてくれない。だとしたら、ガウディはどこを向いているだろうと思いました。ガウディがいつもいっています。「いつも子供心を忘れない」ということ。子供というのは、無茶苦茶な無責任な、何でも勝手にやって、いつもふざけているように思いますが、この世の中で、人類のなかで、一番真剣に生きているのは子供たちです。ただ、真剣にしているフリをしないでください。すばらしい観察眼を持っている。彼らの観察というのは、命がけの真剣さを持っている。大人には真似できないもの。だから、子供心を忘れないことっています。観察するということがとても大切だ、ということをガウディは何度も繰り返しています。その時に私は子供のよう、じゃあ、そっちを向いてみようと思ってみると、その瞬間、10数年もガウディに近づこうと一生懸命に勉強し、努力をして、これ以上先に近づけないと諦めていた深い谷間がすべて埋まって、スーっとガウディの中にはいれて、私の中にガウディが入ってきた気がしました。ガウディをみていればみるほど近づけないもの、ガウディがみている方向をみようと思った瞬間にガウディと一緒になれた。不思議な気持ちです。

つまり、人と人が心をつなげるというのは、お互い目を合わせて話し合いをするのではなく、心をつなげて同じ方向に向かおうとした時に一つになれる。信じるからその人のいっていることが分かるんです。信じている人のいっていることは理解できる。つまり、理解するから信じるのではなく、信じるから理解できる。でも、なかなか人間は信じるということが難しい。もし世界中の人が信じることができたなら、どんな

にすばらしいでしょう。その力を人間は持っているわけです。

**質問者** いつも、心に響く話をありがとうございます。手短かに二つだけお願いします。

一つは、サグラダ・ファミリアが完成したときは、サグラダ・ファミリア全体が楽器になるんだという話を聞いていますが、どのような楽器になって、どういう演奏が行なわれるのか、イメージを先生に伺いたい事と、もう一つ、今まで130年かかってできた現場のサグラダ・ファミリアをみると、これから作る部分の方が大きいような気がします。

それが、2026年にほぼ完成するでしょうという話を聞きますと、あと13年くらいで今まで130年かかったものができてしまう。ここにガウディの心を読み書きながら携わってこられる先生が、若干の違和感を感じているのではと思うのですが、その辺を伺いたいと思います。



**外尾** 私の部屋には、ガウディの塔の模型がありまして、実際に鍵盤を打ちますと、その塔からチャイムのような音がなります。塔が楽器になるというのは、なかなか説明しにくいので模型をつくりました。今建っている、100メートルを超す生誕の門の塔は、ピアノのためにガウディはつくりました。反対側にすでに4本の塔が建っていますが、反対側の受難の門は、パイプオルガンになる予定です。つまり、ピアノと空気を送り出して鳴るオルガンです。100メートルのグランドピアノです。コンサートピアノで2メートルを超えるぐらいですけど、100メートルを超すピアノをガウディは考えました。4本の塔の中に、1本が20メートル近いパイプを84本吊り下げて、下の鍵盤で子供が弾いても町中に音が鳴り響く。もしその塔からピアノが奏でられたら、町中だけではなく、世界中の人が聞くでしょう。

さて、どんな音楽が奏でられるかですか。そこから奏でられ

る音楽は、人類みんなが一つの音楽を聴くという美しさ。今、21世紀になりまして、それまで各国でそれぞれの政治で一つの国をまとめるのが精一杯だった地球という一つの石ころ。それが時速10万キロで宇宙を駆けめぐっているわけです。それが何千年、何万年の間ぶつかったこともない。地球に住んでいる人類全員が、この地球というものをどのように大事にしていくかということ。一つのテーマに人類全員が考える時代が来ている。今まで、それぞれの国で精一杯だったものが、世界中の人たちが力を合わせて、この地球を守っていかなければならない時代が来ている。その象徴になれば良いと思います。サグラダ・ファミリアという大聖堂は、おそらく最後の大聖堂。そして、人類の未来の新しい人類の象徴として、完成に近づければ一番よいと思います。それと、現代のサグラダ・ファミリア、1926年にガウディが亡くなってますから、ちょうど100年目に完成させようとしています。人間というのは、お金が集まり権力があると、自分には何でもできると思う習性があるようです。この建物は生き物です。私たちは建設をしていますが、つくっているのではない、育てているんだと私はみんなに言っています。命を持っているんです。その命が傷つかないように、私たちの短い人生を、次の世代、次の世代に伝えながら、この偉大な命を永遠に活かし続ける。それ以外に偉大な仕事があるでしょうか。人間よりも大きな命。それをガウディは生み出そうとした。そして、次の世代がそれを育み少しづつ大きくしていく、育て上げていく。それは、まさしくこの地球というものを、我々が育まなければいけない、ということに気づかせてくれる。大切なシンボルのような気がします。

それは最高の愛情を込めてつくっていかなければならない。自分たちにできる最高のものをつくらなければいけない。最高のものをつくりながら、私たちが成長しなければいけない。つまり、この教会は道具だと言いました。私たちをつくり上げる道具だと言いました。それをつくりながら私たちが大切なものを学んでいくこと、それがいちばん大切なことのような気がします。確かに、意見の相違で私はいつも心を痛めますが、早くつくろうとすること、それは何か人間のエゴに偏っている。これは命です。果物も命があります。その果物がいつ実るのか、何月何日に出荷だから、それまでに実らせようと言うのは人間のエゴです。しかし、水をやり雑草をぬけば、必ず果実は実ります。その時に目を離さないこと、落ちて腐るようなことが起きないように。その命が必ず実る命を、夢を見ながら育てていくこと、それが私の仕事だと思っています。

#### Prof. Saku's Commentary

公開講座「命の大切さを考える」シリーズを毎年おこなっているが、第69回日本循環器心身医学会期間中に開催した。天気も良く、400名の福岡市民の方に集まっていた。外尾氏の愛と命の大切さを、ガウディの芸術を通して感じさせていただいた。素晴らしい講演だった。